



読書の秋

校長 大関 正人

秋が深まるにつれて、涼やかな風が教室にも届くようになりました。この季節は「読書の秋」とも言われ、多くの人々が心静かに本に向き合う時期です。当校でも、子どもたちが時間を見つけて図書室に足を運ぶ姿が見られます。

当校では、平成20年に発足した「どんぐりの会」の皆様による読み聞かせが、今年度も引き続き行われています。この活動は、単に本を読むだけではなく、物語を通じて子どもたちが想像力を膨らませる貴重な時間を提供しています。読み聞かせは心を動かす体験であり、言葉に触れることで、子どもたちの感性や表現力が豊かに育まれていることを実感しています。

通常、読み聞かせは学年ごとに行われますが、今年度は文化祭の一環として、全校児童でこの活動を楽しむ機会を設けました。読書の魅力を異なる学年の子どもたちと一緒に体感することで、学校全体に読書の喜びが広がることを願っています。また、共通の話題を通じて新たな交流が生まれることを期待しています。



実は、私自身、子どもの頃は読書よりも外で遊ぶことが好きでした。本に親しむようになったのは、自分の子どもに読み聞かせをするようになってからです。『100万回生きたねこ』（佐野洋子作）や『いいやえん』（中川李枝子作）、『ふたりはともだち』シリーズ（アーノルド・ローベル作）など、子どもたちはお気に入りの本を何度もせがんできました。「またこの本？」と思うほど繰り返し読みましたが、そのうち「もっと面白く読んで！」と、私への要求も高まってきました。しかし、読み聞かせをする中で、私自身も心に残るフレーズやお気に入りのページができました。今では、子どもたちも成長しましたが、会話の中で「そう。」と相槌を打つと、誰かが「…と、白いねこは言いました」と返すことがあります。

先日、1年生に谷川俊太郎さんの『ともだち』を読み聞かせる機会がありました。この本は、読むたびに友情の大切さや、自分が友だちにとってどんな存在でありたいかという思いを新たにさせてくれます。シンプルな言葉の中に豊かな感情とメッセージが込められており、普遍的なテーマである友情について深く考えさせられる一冊です。

保護者の皆様にも、ぜひお子さんと一緒に読書の時間を共有していただきたいと思います。感想を語り合ったり、おすすめの本を紹介し合ったりすることで、家族間での絆がさらに深まり、お互いの理解も深まるでしょう。

秋の夜長、読書を通じて新たな発見と感動を楽しむひとときをお過ごしください。